

研究ノート

統計数字に見る

本学教養英語の一面

築 城 真 市

序：英語基礎学力テスト

本学ではこの数年来、新生に「英語基礎学力テスト」なるものを実施している。本来は新生学生の英語の基礎学力を知り、教授法の適正を期する目的で、教養部内の有志の恣意的な教育努力の一環として始められた。従って問題内容も形式も教師それぞれの工夫による多様なものであったが、6年程前に教養部内で統一的な処理をすることになり、問題を固定した。別表1がその問題である。基礎学力を英文理解能力、発表能力、音声知識、語形知識の4面から総合的に診断する形になっている。(Test of the Knowledge and Abilities in Basic English——以下“KABE テスト”と略称する。) KABE テストは各学部新生の英語能力の比較や、歴年の新生の資質の比較など、利用範囲が広がるにつれて、50年、51年には全学的実施にも発展した。しかし所期の目的が一応達成されると、努力に似合う新しい実効も期待できないまま、再び教養部英語科内の自主的利用の形に戻って現在に至っている。

筆者はこのテストの利用を拡大し、独自にさまざまな視角を設定しては必要な他のテストや調査を加え、教授法工夫の頼り所として来た。その中で本学の教養英語教育の全般に関わりのある部分を拾い上げ、このテストの語りかける実相を覗いて見たい。ただ断って置きたいことは、この調査研究が予め計画された統一性のあるものではなく、その都度異なった視点

からあり合せの結果を分析し直す形をとっているもので、厳密な科学性を欠いていることは否めない。ただこれを公表することで騒ろげながらも本学教養英語教育の諸状況が浮び上り、今後の教授法研究への踏み台ともなり得るし、慧眼な他の研究者がこのなまの数字の中から筆者の気づかない重要な事実を見抜いてくれることも期待できるだろう。その意味から、頰雑をいとわず、分布表も添えておくことにした。以下順次視角を設定しつつ、調査結果を検討して行きたいと思う。

(設問1) 本学の教養英語の講義は実効をあげているか？

一般に、大学の教養科目としての英語教育の実効には疑念を抱く人も多い。現実には、学生側に学習意欲が乏しく、教師側に教授法工夫への関心が欠ける場合も稀ではないので、学生の英語能力は大学受験時を頂点として、その後は退化の一途を辿り、大学の教養英語教育は学力低下を必死にとどめているに過ぎないとさえ酷評もされる。筆者も本学学生の学習姿勢が必ずしも積極的でない印象から、教授法に必死の工夫を凝らし乍らも、常にこの危惧を拭い切れずに居た。そこで過去4ケ年にわたり、同一クラスに KABE テストを、学年の始めと終りの2回実施することにより、基礎的な英語能力の推移を覗いてみることにした。同一学生に同一問題を2回実施する場合には、当然2回目には所謂「馴れ」の学習効果が含まれ、完全な比較資料にはなり得ないことが考えられる。しかし実際にはその心配は絶無に近い。それは、

(ii) 入学後最初の講義時間に実施される第1回目のテストは、何の解説もなく取り上げられ、学生相互にこのテストについて話し合う程の親しさも、関心もないまま、完全に忘れ去られている。

(ii) 一年の最後の講義時間に実施される第2回目のテストは、一年の長期を距てて、「馴れ」の学習効果を殆ど失っている。

からである。従ってこのテストは2回とも、純粹に学生の現代的な能力を反映していると見て間違いはない。とりあえず54年度を例にとり、その結果を見てみよう。筆者が担当したのは次の3クラスである。

(表1) 2回のKABEテストの得点分布(54年度)

体育学部1年H班(女子)

得点	1回目	2回目	10点以上上ったもの	
			上ったもの	下ったもの
90~100		1		
80~89	3	8		
70~79	8	9	3	
60~69	5	5	3	
50~59	7	5	3	
40~49	4	2	2	1
30~39	4	2	1	
20~29	6	5	2	
10~19	1	1		
0~9				
計		38人	14人	1人
平均	53.9	61.8		

↷ 成績上昇率1.15

体育学部1年D班(男子)

得点	1回目	2回目	10点以上上ったもの	
			上ったもの	下ったもの
90~100				
80~89	2	3		
70~79	5	4		1
60~69	4	5		
50~59	10	9	1	2
40~49	9	8	2	1
30~39	2	4		
20~29	4	5	2	
10~19	3	1	1	
0~9	1	1		
計		40人	6人	4人
平均	49.5	50.5		

↷ 成績上昇率1.02

商学部1年2班

得点	1回目	2回目	10点以上上ったもの	
			上ったもの	下ったもの
90~100				
80~89	1	4		1
70~79	5	4		
60~69	11	11	4	
50~59	6	9	2	
40~49	7	3	3	
30~39	2	3	1	
20~29	2	2	1	
10~19	2		2	
0~9				
計		36人	13人	1人
平均	54.7	59.4		

↷ 成績上昇率1.09

3クラスの合計

得点	1回目	2回目	10点以上上ったもの	
			上ったもの	下ったもの
90~100		1		
80~89	6	15		1
70~79	18	17	3	1
60~69	20	21	7	
50~59	23	23	6	2
40~49	20	13	7	2
30~39	8	9	2	
20~29	12	12	5	
10~19	6	2	3	
0~9	1	1		
計		114人	36人	6人
平均	52.6	57.1		

↷ 成績上昇率1.09

学生の総合的な英語能力は、一年間に明瞭な伸びを見せている。平均して、1割近い上昇率はますますである。なお綿密に数字を見熟めると、二三の推定が浮び上ってくる。即ち、

(1) 同じ学生が同じテストを2回受けても、成績に多少の揺れは伴う。しかし10点以上の揺れは有意義と見なければならぬ。成績が10点以上も下ったもの6人に対し、上ったものが33人も居ることは喜ばしい。ただ上ったものは平均点以下の学生に多く、下ったものは割合成績の上位の学生に多いのは、教室活動へ向けた学習姿勢の緊張と弛緩の差異に基づいているように思われる。

(2) 成績上昇率が体育学部女子クラスが一番高く、商学部のクラスがこれに次ぎ、体育学部男子クラスが一番低く、その上昇率1.02は殆ど現状維持に近い。筆者の印象では、この結果が、教室での学習姿勢と色濃い関連を示しているようである。殊に体育学部女子クラスの成績平均が入学時は商学部クラスより低かったのが、学年末ではこれを追い越しているのが印象的である。一般的に言えば体育学部の学生は、商学部の学生より、英語のモードも低く、学習への動機づけも弱い上に、実技に大巾な時間がとられ勝ちで、成績の上昇も難しい状況下にあると言わねばならない。にも係らず同じ状況下で同じ教師の指導の下、男女でその成績上昇率が顕著な差異を見せたことは、指導に従順な女子の学習姿勢に鑑み、*motivation* の重要性を見せつけられる。

(設問2) 大学の講義は英語力のどの領域を伸ばしているか?

何れにせよ本学の学生は、一年間の英語の講義により、多少とも総合的な基礎英語力を伸ばしていることを知ったが、では一体どの部面で最も顕著な伸びを示しているのだろうか。KABE テスト (別表1参照) は、ⅠとⅡが英文理解力 (40点)、ⅢとⅣが音声知識 (20点)、Ⅴが語形知識 (10点)、ⅥとⅦが英文発表力 (30点) という構成になって居り、総合的な知識と技能が調査される。

(正確には、Ⅰの給合問題の中で、問3と問8は発表力の方へ入れるべき性格のものだから、この6点を移すと、英文理解 (34点)、音声 (20点)、語形 (10点)、発表 (36点) となる。次の統計処理はこの配点に基づいている)。

この領域別の得点分布を出してみると次のようになる。

(表2) K A B E テストの領域別得点分布 (54年度) (3 クラス合計)

英文理解力

得点	1回目	2回目
31~34	6	16
26~30	15	24
21~25	33	28
16~20	31	22
11~15	16	17
6~10	11	5
0~5	2	2
計	114 人	
平均	19.61	21.97
%	51.8	58.7

上昇率
1.13

英文発表力

得点	1回目	2回目
31~36	2	6
26~30	10	12
21~25	22	21
16~20	16	24
11~15	27	23
6~10	24	18
0~5	13	10
計	114 人	
平均	14.99	16.77
%	36.1	41.0

上昇率
1.14

音声知識

得点	1回目	2回目
18~20	24	30
15~17	23	20
12~14	22	14
9~11	20	21
6~8	13	21
3~5	7	5
0~2	5	3
計	114 人	
平均	12.58	12.74
%	57.9	58.7

上昇率
1.01

語形知識

得点	1回目	2回目
9~10	15	13
7~8	24	33
5~6	23	21
3~4	20	20
1~2	21	18
0	11	9
計	114 人	
平均	4.88	5.16
%	48.8	51.6

上昇率
1.06

この表からほぼ次のような事実が推断される。即ち、

(1) 入学当初の学生は音声知識・英文理解力・語形知識の順で(100点法に換算した%の欄参照)強いが、英文発表力は格段に弱い。

(2) 一年間の学習による成績の上昇率では、英文理解と発表の2技能面

で高く、音声と語形の2知識面で低い。

この現象は教師の講義形態と学生の学習姿勢の両面に原因があるようである。先ず筆者の講義は(Ⅰ)総合教材用テキストを用い(Ⅱ)テープを多用しながら(Ⅲ)訳読と作文を中心に(Ⅳ)文法知識を固めつつ(Ⅴ)オールラウンドな総合練習をする形式をとっている。従って英文理解と発表の技能啓発がどうしても中心となり、高校の授業に見るような細かい知識の詮索は怠り勝ちになる。音声面ではテープ使用による会話練習、質問応答などから、聞きとり、話しかたなど「技能」の伸張はあるものの、テストに求められているような「知識」とはなっていない。他方学生の方も、単位取得の必要の中で、とかく解釈と作文へ努力を傾け勝ちであり、記憶努力を伴う細かい知識の修得は怠り勝ちになる。ペーパーテストでは「技能としての音声」が調査できないことと、逆に定期テストの形式が学生の努力の方向を規定してしまうことを、この調査が語りかけてくる。

更にこの要素別成績上昇率を、クラス毎に比較して、前述のクラスの学習姿勢との相関を覗いてみよう。

(表3) クラス毎の要素別成績上昇率

要素別	体育学部 (女子)	体育学部 (男子)	商学部	3クラス (全員)
理解	1.20	1.00	1.17	1.13
発表	1.19	1.10	1.06	1.14
音声	1.02	1.02	1.00	1.01
語形	1.08	0.96	1.15	1.06
総合	1.15	1.02	1.09	1.09

面白いことに、各クラスがそれぞれの個性的な伸び率を示した。目立つのは、

(1) 体育学部女子クラスは教師の重点配分を忠実に反映しながら、全般的に伸びている。

(2) 体育学部男子クラス

は全般に伸びが鈍い。特に理解力の伸びが乏しいのは気になる。また語形知識が逆に落ちこんでさえいるのは、記憶努力を欠き、所謂「忘れ」の現象に身を委ねていることを示して、心寒い。

(3) 商学部クラスは外書講読のニーズもあって、英文理解面に一応の努力を示している。従って文法知識への関心も高く、語形知識面に顕著な伸びを見せている。

(設問 3) 本学の学生は英語学習にどれ程の時間を費しているか?

学生の学習姿勢がその成績上昇と色濃く関わり合う実態を見た。一般に最近の大学生は勉強しないと言われるが、本学の学生は一体どれ程の時間を英語の予習・復習に費しているのだろうか気になる。そこで学生に趣旨をよく理解させ、正直な勉強時間を書かせた。これには個々人の主観性が大巾に混入することだから、その結果の判断は慎重でなければならない。ただ大まかな実相の影は浮び上るだろう。

(表 4) 本学学生が英語の予習、復習に費す週当りの平均時間数

勉強時間	体育学部 (女子)	体育学部 (男子)	商学部	計
3時間以上	1	2	2	5
2.5時間	1			1
2	6	4	1	11
1.5	2	3	6	11
1	7	11	16	34
0.5	14	20	13	47
0~0.4	4	7	6	17
調査人員	35 ^人	47 ^人	44 ^人	126 ^人
平均	1.02 ^{時間}	0.89	0.95	0.95

週当り平均の学習時間は0.95時間と出た。成程勉強はしていない。ただ面白いことにはこの大まかな勉強時間が成績上昇率と見事な相関を見せたことである。並べてみよう。

(表 5) 勉強時間と成績上昇率

	体育学部 (女子)	体育学部 (男子)	商学部	計
勉強時間	1.02 ^{時間}	0.89	0.95	0.95
成績上昇率	1.15	1.02	1.09	1.09

(設問 4) 勉強時間と成績変化にどんな相関があるか?

主観性の高い従って信頼度の低い勉強時間の統計結果を資料として、そ

の成績変化との相関を調べてみることは、始めから無理と承知で、勢の赴くままに下の如く相関分布表を作り、相関係数を出してみた。

(表6) 勉強時間と成績変化の相関表

成績 変化	+15点 以 上 上 昇	+14 }	+ 9 }	+ 4 }	- 5 }	-10 }	-15点 以 上 下 降	計	
勉強 時間		+10	+ 5	- 4	- 9	-14			
3時間以上	1	1		1				3	
2.5時間	1							1	
2	2		2	3	1			8	
1.5		1	2	3	3	1		10	
1		5	9	4	5			23	
0.5	5	4	5	15	2		1	32	
0~0.4		4	2		1	1	2	10	
計	9	15	20	26	12	2	3	87	→SD=1.40
									↑ SD=1.55

$$\text{ピアソンの相関係数 } r = \frac{\sum xy}{\sqrt{\sum x^2 \sum y^2}} = 0.35$$

分布図からの間接計算によるピアソンの相関係数は0.35である。「まずまずの相関」程度である。思ったより低かったのはやはり色濃い主観性の混入のせいだろう。特に左下隅に偏ったかなりの数の学生(勉強時間が少ないのに高い成績上昇を示している)の中には、よく見かける「勉強しないふり」の銜いがあるようだ。やはり表5にみるような大ざっぱな統計結果にとどめ、それ以上の利用は misleading であろう。

(設問5) 本学学生の語いはどれほどか?

どうやら基礎的な知識の脆弱さと、地道な努力への関心の薄さが窺える本学学生について、もう一つ気になるのはその語い力である。

従って別表2に示すような完全想起法による単語テストを、前記3クラスに試みた結果は次のようである。

(表7) 単語テスト得点分布

得点	体育学部 (女子)	体育学部 (男子)	商学部	計
9~12				
8~8.5			1	1
7~7.5	1		3	4
6~6.5	1	2	1	4
5~5.5	1	4	4	9
4~4.5	12	1	5	18
3~3.5	9	5	6	20
2~2.5	12	9	9	30
1~1.5	11	8	10	29
0~0.5	2	8	6	16
計	49人	37人	45人	131人
平均	2.86	2.22	2.94	2.71
%	23.8	18.5	24.5	22.6

同テスト品詞別得点分布

得点	名詞	動詞	形容詞
4	1	1	
3~3.5	19	3	
2~2.5	46	14	5
1~1.5	43	36	21
0~0.5	22	77	105
計		131人	
平均	1.75	0.84	0.49
%	43.8	21.0	12.3

単語だけを取り出して、その意味を想起するのは難しい。それにしてもこの結果はひどい。テストに用いた単語は E. L. Thorndike の基本語のうち、頻度 1 b から 2 a に跨るもの（即ち重要 1,500 語に含まれるもの）ばかりであるから、平均 22.6% の出来は悲しい。品詞別に比較すると、名詞の想起は 43.8% で比較的よいが、動詞は 21.0% とひどく、形容詞に至っては 12.3%、1 割しか想起出来ない。或る程度の語いの大きさが、英語力の基盤であることを思えば、この貧弱な語い力では「英文理解」は「謎解き」の感を呈するに違いない。もともと本学学生の語いは貧しく、同一テストを 48 年度の 2 クラス（98 名）に実施した時も全体の平均は 17.5% に過ぎなかった。（その他に違った形式の単語テストも随時実施して来たが、同一テストでないので比較に持ち出す訳には行かぬものの、その結果の感想は変わらない。）

試みにこの単語テストを市内の某高校（進学校）の 2 年生 2 クラスに、学年の終了時に実施して貰った結果を見てみよう。

(表8) 市内某高校2年(終了時)
の単語テスト得点分布

得点	a組	b組	c組	計
11~12	5	5	3	13
10~10.5	5	1	2	8
9~9.5	2	3	5	10
8~8.5	3	2	6	11
7~7.5	6	4	5	15
6~6.5	7	8	7	22
5~5.5	5	3	3	11
4~4.5	3	5	6	14
3~3.5	2	5	5	12
2~2.5	4	1	1	6
1~1.5	1	4	1	6
0~0.5				
計	43 ^人	41 ^人	44 ^人	128 ^人
平均	6.83	6.10	6.61	6.52
%	56.9	48.8	53.0	52.3

同テスト品詞別得点分布

得点	名詞	動詞	形容詞
4	40	20	4
3~3.5	36	39	16
2~2.5	28	32	17
1~1.5	20	28	45
0~0.5	4	9	46
計		128 ^人	
平均	2.94	2.50	1.37
%	67.2	56.3	27.9

品詞別内訳の傾向は本学学生と変わらず、名詞に強く、形容詞に弱い。ただ全般に本学学生をかなり上廻っている。「単語の正確な記憶」のような地道な学習努力を、本学学生が欠いていることを如実に物語っている。

(設問6) 語いの大きさは英語の基礎能力とどんな関連があるか?

語いの大きさが英語の基礎能力と強い相関を持つことが予想されるので、KABEテスト(2回目)の成績との相関表を作ってみた。(次頁)

相関係数は0.43、「かなりの相関がある」と判断される。左下隅に在るかなりの数の学生(単語力の貧しさにもかかわらず、KABEテストの成績は良いもの)は、かなりの技術面の能力をもちながら、地道な努力を怠り、語いが正確さを欠いているに違いない。文中に置けば想起される単語も多いのであろう。現にその誤答のうち、

i) 品詞を誤るもの〔0.5を与えた〕

例: tender やさしく, proud 誇る, ripe 熟す, prepare 準備,
pleasure 楽しむ, など

ii) 似かよった語と混同するもの

例: employ 空 (から) の, degree 同意する, ripe くちびる,
bitter 少しの, burn 生れる, など

から見て, そのほけたままの記憶影像の存在を知る。何れにせよ単語テストを, もっと詳細かつ科学的に実施してみる必要がある。

(表9) 語いの大きさとK A B Eテスト
(2回目)の成績との相関表

KEBE テスト	100	89	79	69	59	49	39	29	19	9	計
単語 テスト	90	80	70	60	50	40	30	20	10	0	
点											
11~12											
9~10.5											
7~8.5			2	2	1						5
6~6.5		2		1							3
5~5.5	1	3	2	2	1						9
4~4.5		1	6	3	3	1	1	1			16
3~3.5		1	2	4	3	2	4				16
2~2.5		3	2	7	5	3		2	1		23
1~1.5		3	3	3	4	5		3	2		23
0~0.5					5		3	4			12
計	1	13	17	22	22	11	8	10	3		107 → S D = 2.31
											↑ S D = 1.94

ピアソン相関係数 $r = 0.43$

〔注〕相関表の総計が, 同じ3クラスの合計でありながら, 前記の諸表と少しずつ違っているのは, それぞれの調査実施日が違うため, 相関2項目のどちらかに欠席したものが省かれるからである。(欠席者による数のずれは以下の表にもさまざまな様態で見られるが一々注記しない。)

(設問7) 基礎学力は大学の学習成績とどんな関連があるのか?

K A B E テストに映し出された総合的な英語の基礎学力は, その学生が大学に於て示す英語教科の学習成績と, どれ程の相関を示すだろうか。筆

者は前期・中間・後期に実施した定期テストの成績を平均して100点法に換算したものと、KABEテスト(2回目)の成績との相関分布を調べてみた。次の相関表がそれである。

(表10) 大学の英語教科の学習成績とKABEテスト(2回目)の成績との相関表

学習成績	点										計
KABEテスト	100	89	79	69	59	49	39	29	19	9	
	} 90	} 80	} 70	} 60	} 50	} 40	} 30	} 20	} 10	} 0	
90~100		1									1
80~ 89	2	5	3	3	1	1					15
70~ 79		7	4	4	1	1					17
60~ 69		2	7	5	3		4				21
50~ 59		3	1	5	7	5	2	1			24
40~ 49				2	5	3	2				12
30~ 39					3	1	4	2			10
20~ 29			1	1		4	2	2		1	11
10~ 19							1			1	2
0~ 9									1		1
計	2	18	16	20	20	15	15	5	1	2	114

←SD=1.98
↑
SD=2.02

相関係数 $r=0.70$

分布図はかなり美しい直線を描いている。相関係数も0.70、明らかに「高い相関がある」のレベルに入っている。結果は極めて常識的なことだが、大学の英語科目の学習では、入学時に持っている基礎学力に相応する成績しか挙げられないのが一般である。逆に言えば無理な学力で入学した学生は苦労せざるを得ない。英語学習は「累積的学習」であることを如実に物語っていることになる。

(設問8) 本学入学者の英語の学力は年々上昇しているか?

英語の基礎学力が、入学後の学習と高い相関がある以上、逐年本学へ受け入れる学生の基礎学力が気にかかる。肌感を感じる所では、本学への受験生の質は年を追って向上しているように思われる。果してそうだろうか。

KABE テストが示す実態を見てみよう。

(表11) 本学KABEテストの歴年成績分布 (50年~54年)

50年度					51年度					
得点 点	文	法	商	体	計	文	法	商	体	計
90~100	9	1	2	1	13	5	1	1	2	9
80~89	31	3	13	8	55	24	2	12	19	57
70~79	47	14	31	23	115	39	14	32	49	134
60~69	68	24	75	35	202	38	36	64	80	218
50~59	79	58	113	72	322	57	60	126	91	334
40~49	80	79	177	105	441	59	74	134	97	364
30~39	99	113	183	144	539	48	96	139	109	392
20~29	87	111	150	170	518	58	81	65	126	330
10~19	42	91	89	140	368	27	45	21	116	209
0~9	16	13	18	56	103	10	8	1	36	55
計	558 ^人	507 ^人	851 ^人	760 ^人	2676 ^人	365 ^人	417 ^人	595 ^人	725 ^人	2102 ^人
平均	44.8	34.9	39.4	33.2	38.5	47.4	38.3	46.1	39.9	42.8
52年度			53年度			54年度(部分)				
得点 点	商	体	法	商	体	英文	商	体		
90~100	3		1	4	35	6				
80~89	8	25	14	23	51	17	2	5		
70~79	50	80	41	67	91	16	9	17		
60~69	105	90	54	117	95	16	12	11		
50~59	177	130	67	162	75	20	9	20		
40~49	190	120	101	197	40	13	8	20		
30~39	128	111	74	87	57	7	2	8		
20~29	61	96	50	44	63	6	2	11		
10~19	9	78	31	9	70	2	2	6		
0~9	2	27	7	1	18			2		
計	733 ^人	757 ^人	440 ^人	711 ^人	565 ^人	103 ^人	46 ^人	100 ^人		
平均	49.1	39.9	46.5	52.1	50.5	61.8	56.7	50.7		

各学部ともに順調な伸びを示しているのは嬉しい。ただ50年、51年を除いては全学的統計処理が出来なかったのは残念だが(54年度に至っては学部の全員処理さえ叶わなかった)、5年間を通して数字の出た商学部と体育

学部¹⁾の平均点を歴年一覧表にしてみると、

年度	50年	51年	52年	53年	54年 (一部)
学部					
商学部	39.4	46.1	49.1	52.1	56.7
体育学部	33.2	39.9	39.9	50.5	50.7

となり、その順調な向上ぶりが浮び上ってくる。毎年の入学試験の採点で、肌を感じる本学志願者の質の向上を、上記の統計結果が如実に実証していて、本学の将来を明るく展望させてくれる。

(設問9) 本学学生の在学中の英語力の上昇率は漸次よくなっているか?

上記のように、本学の新入学生の質の向上は鮮明である。それに伴い、その学習姿勢も漸次よくなっているように思われる。では実際に英語の基礎学力向上の面で、年々どのような上昇率を示して来ているだろうか。筆者が担当して来た体育学部1年の女子クラスについて、その5年間の歴史を一覧してみよう。

(表12) 体育学部1年女子クラスの5年間のKABEテスト成績分布

得点	50年度		51年度		52年度		53年度		54年度	
	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
90~100				1		3		1		
80~89	2		3	1	4	3	4	3	8	
70~79	1	6	4	5	9	8	7	8	9	
60~69	5	1	6	11	7	11	9	5	5	
50~59	8	10	9	6	6	3	3	7	5	
40~49	6	8	12	6	2	1	4	4	2	
30~39	5	5	11	10	5	3	4	4	2	
20~29	8	6	9	3	7	3	2	6	5	
10~19	5	4	9	1	2	7	2	1	1	
0~9			1				1			
計	40人		64人		43人		39人		38人	
平均	43.3	45.3	42.7	51.5	55.0	53.0	59.1	53.9	61.8	
上昇率	1.05		1.07		1.12		1.15			

① 51年度は2回目の実施できなかった。

単純に考えても、この5年間の上昇率は

1.05→…→1.07→1.12→1.15

と着実によくなり続けている。しかも分母となる1回目の成績が逐年高くなっていることを思えば、実際の伸びの向上はこの数字以上に高い筈である。この学習効果の伸長は、同一教師の指導下に見る結果であるから、明らかに学生の学習姿勢の向上に負う所が大きいと言わねばならない。更に視点を変えて、1回目と2回目で、10点以上の成績の変化を見せた学生の数を出してみると、次のようになっている。

(表13) 10点以上成績の上下した学生数の分布の歴史(体1女)

1回目 の得点	50年度		52年度		53年度		54年度	
	上った者	下った者	上った者	下った者	上った者	下った者	上った者	下った者
90~100								
80~89		1						
70~79			1		3	1	3	
60~69	1	2	6	1	1		3	
50~59	1	2	2	1	1	1	3	
40~49	1	2	1	2	1		2	1
30~39	2		3	2	2	1	1	
20~29	3	1	1		2		2	
10~19	2		1		4			
0~9								
計	10人	8人	15人	6人	14人	3人	14人	1人
全員に対する%	25.0%	20.0	34.9	14.0	35.9	7.7	36.8	2.6

顕著な成績の上昇を見せたものは、その百分率で見ると、僅かずつながら着実に増加している。それよりも下降を見せる学生が激減して来た現象の方が意義深い。殊に成績向上者が、従来のように学力の低いものに限られず、全般的に上位の方まで分布して来たことは、学生の学力のバラつきが小さくなり、中間学生のレベルで教授する講義に、全員が噛み合ってきたことを暗示している。

(設問10) 英語力のどの領域が特に上昇率を向上させているか?

前表で見た基礎学力の上昇率の進展を、その領域(2技能・2知識)に分解して、今少し詳細に検討して見よう。その分析から、学生が年と共にどの部面で著しい伸びを見せて来たかが分り、その理由がどこに在るかを探ることは、今後の指導方向への反省と考究に資するだろうから。便宜上最近3ヶ年の歴史に限定して、次のように表示する。

(表14) 体育学部女子クラスの3ヶ年の領域別成績分布

a 英文理解力

得点	52年度		53年度		54年度	
	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
30~34	1	8	4	9	3	10
25~29	12	15	10	16	9	13
20~24	7	3	8	1	10	4
15~19	12	5	5	7	6	3
10~14	6	8	2	3	5	5
5~9	4	3	6	2	3	3
0~4	1	1	4	1	2	
計	43人		39		38	
平均	18.98	21.65	18.79	23.41	20.34	24.45
%	55.8	63.7	55.3	68.9	59.8	71.9
上昇率	1.14		1.25		1.20	

b 英文発表力

得点	52年度		53年度		54年度	
	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
30~36	2	3	3	6	1	3
25~29	2	1	3	1	4	8
20~24	3	10	7	8	9	6
15~19	12	7	10	10	5	6
10~14	6	4	4	4	4	6
5~9	12	8	4	4	10	5
0~4	6	10	8	6	5	4
計	43人		39		38	
平均	12.93	13.63	15.21	16.74	15.36	18.29
%	35.9	37.9	42.3	46.5	42.7	50.8
上昇率	1.06		1.10		1.19	

c 音声知識

得点	52年度		53年度		54年度	
	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
18~20	18	16	11	16	9	11
15~17	4	7	7	6	8	12
12~14	6	8	7	4	9	2
9~11	6	7	9	3	7	5
6~8	6	1	3	6	3	5
3~5	1	2	1	1	2	3
0~2	2	2	1	3		
計	43人		39		38	
平均	13.77	14.12	13.54	13.62	13.55	13.79
%	68.9	70.6	67.7	68.1	67.8	69.0
上昇率	1.02		1.01		1.02	

d 語形知識

得点	52年度		53年度		54年度	
	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
9~10	2	1	5	5	3	4
7~8	8	11	8	9	9	9
5~6	10	9	8	11	7	6
3~4	5	10	10	3	6	9
1~2	12	4	1	6	7	8
0	6	8	7	5	6	2
計	43人		39		38	
平均	4.01	4.34	4.91	5.06	4.45	4.82
%	40.1	43.4	49.1	50.6	44.5	48.2
上昇率	1.08		1.03		1.08	

各欄下の上昇率を見ると，大体次のように言える。

(1)概して毎年英文理解技能がよく伸びている。

(2)英文発表技能が年を追ってよく伸びるようになって来た。

(3)知識面では音声面でも語形面でも，余り目立った伸びはなく，しかも年を経ても変わっていない。

これは既に54年度の分析（設問2）の際にも触れたように，筆者の教授法の責任が大きい。ただ英文発表技能の伸びが目立って来たことは，学生側の積極性の伸長とも関連があることだけに喜ばしい現象と見るべきであろう。何れにせよ学生が示す学業上の成果は，教師の姿勢の鏡でもあり，筆者はこの数字の中から謙虚に将来の改善を考えたい。

（設問11）学生はどんなニードを持っているか？

本学の学生は英語学習のどの部面に最も力をつけたいと感じているのであろうか。筆者は次表に見るような5つの項目に英語学習の目標領域を設定し，その中で最も力を身につけたいと願うもの一つを答えさせた。

（表15）本学学生が望む学習領域

領域	聞く力	話す力	読む力	書く力	文法知識	計
学部						
体育 男子	5人	28人	3人	3人	7人	46人
学部 女子	4	23	5	2	3	37
商学部	6	21	10	0	7	44
計	15	72	18	5	17	127
%	11.8	56.7	14.2	3.9	13.4	100

漠然と時代を反映した学生の願望が出ている。「話せたい」というのが身近に感じとっている切実な必要なのであろう。ただ外書講読につながる「読む力」へのニードが商学部でやや高いのは当然だが，その他には学部や男女差による相違は見当らない。ただ「話す力」を要望する学生の声と，大学教養英語の真の目的との調整は，理念的にも現実的にも，多くの

問題をかかえている。何れにせよ真剣な検討を迫る一事実であることには間違いはない。

×

×

なお筆者は本学教養英語の実状を一層明らかにするため、引続き次の設問を立てて、統計処理を試みた。

(設問12) 本学学生の入学時の英語力は、他大学（および高校）と較べてどのようか？

(設問13) 試験による入学者と推薦による入学者はそれぞれどんな英語学力を持っているか？

(設問14) 推薦による入学者は、入学後果して伸びるか？

(設問15) 職業課程出身者の英語学力はどのようか？

(設問16) 職業課程出身者は、入学後伸びているか？

(設問17) 併設高校出身者の英語学力はどのようか？（また入学後伸びているか？）

その結果は、一言で言えば、誠に厳しいものがあつた。しかし何れも学内的関心の域を出ない事項であるから、ここでの公表は割愛する。

×

×

以上本学の教養英語に関係する諸事情を、各種のテストやアンケートの中に、共時的にも歴史的にも目を凝らして来たが、その数字の示唆する所は厳しく、その投げかけてくる問題は難しい。しかし現実を汲みとる何らかの工夫は教師側の責任であり、困難な努力が要請されている。

全体的には、新入学生の英語能力が高まり、そのバラつきも縮まりつつあるものの、まだまだ選抜方法別、課程別による学力差も大きく、学生のニードや意欲も、学部別や性別或は個人別に異なっていることは蔽えない実相である。とすれば現状に見るような画一的平均クラスの編成では、講義が物足りないもの、講義について行けないものの両面からはみ出すものも多く、学習意欲も殺がれ勝ちになるのは自然であろう。どうしても学生

個々人の学業成就度とその必要や興味とを考慮し、多様な中間目標を並列して、所謂「目標別クラス」を編成し、学生の動機づけを適正にした上で、学習への姿勢を積極化（前向きに）させる必要がある。上掲の諸結果を、その慧眼に捉えて、適切なアドバイスを頂ければ幸いである。

別表1

英語基礎学力 (KABE) テスト

I. 次の英文を読んで、続く問に答えよ。

We Japanese think that an elevator is something like a room, only it moves up and down. This is a big mistake. An elevator is a vehicle. There is always some danger in riding an elevator. The door may shut before you go out. It may shut on you while you are going out. So, if you are a gentleman, you should let the women and children (3) safely out of it before you do so. The same caution is necessary when getting in the elevator. When you want a lady to get in or out before you, say, "After you." If the lady is your friend, you may say, "Beauty before age." It will please her. But the order of the three words is important. Once a Japanese student said to an American woman, "Age before beauty." She did not speak to him after that.

(Notes) vehicle 車 caution 用心 order 順序

(1) 下線の部分を言いかえると次のどれが最も適当か。記号で示せ。

- ア. because you ride イ. before you ride ウ. if you ride
エ. when you ride オ. though you ride

(2) この意味は戸がしまって、あなたがどうなることか。

(3) ここへ入るべき語句は下のどれが適当か。記号で示せ。

- ア. go イ. to go ウ. goes エ. going オ. gone

(4) これは何をすることか。その内容を具体的に英語で示せ。

(5) ここに2語を補うことができる。その2語を示せ。

(6) こんな場合日本語ではどう言うか。

(7) この意味は次のどれか。記号で示せ。

- ア. 年をとると美しくなくなる。 イ. 老人より美人を先に。
ウ. 美人に年齢がない。 エ. 年をとる前は美しい。
オ. 時代の先端をゆく美しさ。

(8) この文を受動態（受身形）にせよ。

(9) この3語とは何か。英語で示せ。

(10) このことの原因は何か。次の中から最も適当なものを選んで、その記号を示せ。

- ア. Because he did not let her get out of the elevator before him.

- イ. Because he did not respect old people.
 ウ. Because he was not a good speaker of English.
 エ. Because he said that she was old and not beautiful.
 オ. Because he said he thought more of age than of beauty.

II. 次のそれぞれの文に最も自然に続くものを下の語群から選んで、記号で示せ。

- (1) He was usually careful,
 (2) We came to a little town,
 (3) It must have been morning,
 (4) Please show me
 (5) The stone was too heavy
- (ア) where we stayed for the night.
 (イ) that he could not sleep at all.
 (ウ) how to play the game.
 (エ) but he made some mistakes this time.
 (オ) for the birds were singing outside.
 (カ) for me to lift.

III. 次の各行で、下線部分の発音が、他の4つと明瞭に異なるものが一つずつある。記号で示せ。

- (1) ア. cloud イ. south ウ. coutry エ. house オ. now
 (2) ア. thing イ. thick ウ. through エ. though オ. thought
 (3) ア. horses イ. knives ウ. inches エ. boxes オ. dishes
 (4) ア. asked イ. liked ウ. wanted エ. jumped オ. passed
 (5) ア. laugh イ. night ウ. light エ. high オ. caught

IV. 次の文をふつうに読む時の抑揚を、例に示すように ↘ ↗ で示せ。

(例) Here is a fine piano (↘). Is this yours (↗)?

- (1) Which do you like better (), coffee () or tea ()?
 (2) I visited three cities (); Boston (), New York (), and Washington ().

V. 例に示すように、() の中へ適当な一語を入れて、C—Dの関係が、A—Bの関係になるようにせよ。

- | | A | B | C | D |
|-----|---------|-----------|------|-----------|
| (例) | cow | cows | man | (men) |
| (1) | begin | beginning | die | () |
| (2) | careful | carefully | easy | () |

- | | | | | |
|-----|--------|--------|---------|-----|
| (3) | break | broken | bring | () |
| (4) | France | French | Germany | () |
| (5) | well | better | little | () |

VI. ()の中へ、文末の単語を正しい形に変えて入れよ。

- (1) Julie can speak Japanese () of us all. (well)
- (2) I thought that he () fail in the examination. (may)
- (3) The knife is used for () meat. (cut)
- (4) You did not enter my room, () you? (do)
- (5) Have you ever read a book () by Shakespeare? (write)

VII. ()の中へ適当な一語を入れて、日本文の意味を表わす英文を完成せよ。

- (1) チョークを一本下さい。
Please give me () () () chalk.
- (2) あなたはもう一日当地に滞在しなければならないでしょう。
You () () () stay here another day.
- (3) あなたに明日もう一度来ていただきたい。
I want () () () here again tomorrow.
- (4) 駅まで歩いて行くとどれぐらいかかりますか。
() () does it () to go to the station on foot?
- (5) 父は私に庭で遊ばないようにと言いました。
My father told me () () () in the garden.

(注) 解答欄は省略してある。

別表 2

基礎語いテスト

次の単語の意味を書け。

heaven	pleasure	danger	degree
burn	whisper	prepare	employ
ripe	bitter	proud	tender